

デザイン力による地域活性化 ～福岡地区における山笠復興の取り組み～

瓜生隆弘

The Role of Design for Regional Development - The Case Study of Yamakasa in Fukutsu City -

Takahiro Uryu

Abstract

This report describes a role of design for an action of a festival revival in Fukutsu-city. Fukutsu-city was created through the merger of Fukuma-cho and Tsuyazaki-cho in 2005. There is a festival that continues from the Edo period in Tsuyazaki-cho. The festival is called Yamakasa in Tsuyazaki-cho. Three Nagare teams continue to this day. On the other hand, there was a festival from Meiji period in Fukuma-cho, but it was cease now.

Men of Fukuma-cho organized a group and participated in Yamakasa in Tsuyazaki-cho from 2006 to the present. In 2007, I was in charge of the design of crest.

Key words : regional development, happi coat, sake label, yamakasa

1. 背景と経緯

地方分権、行財政改革の手段のひとつとして、地方行政構造を変革するために全国で市町村合併が推進されてきた。福岡県では合併の動きがやや鈍いと言われたが、平成 17 年 1 月 24 日、旧福岡町と旧津屋崎町が合併し福津市が誕生した。福津市は合併を機に総合計画を始めとする複数の計画を同時に策定して、まちづくり計画の整合性を高め、総合的なまちづくりの方針を定めた。総合計画では新市を 8 つの地域（勝浦、津屋崎、宮司、神興、神興東、福岡、福岡南、上西郷）に分け「地域づくり計画策定市民会議」を組織、地域づくり計画を策定した。総合計画に定めた 18 の基本方針のひとつとして「地域を知り、郷土を愛する環境をつくる」を置き、施策展開の中に「歴史・文化を後世に伝えるための環境を整える」を定めた。具体的には「地域に受け継がれている祭りや伝統文化の伝承を財政的・人的に支援する」とした。旧福岡町では現在まで受け継がれている祭りは少なく、ほとんどが途絶えている。畦町区（上西郷）の天

満神社には広い檜舞台があり、佐賀仁輪加や博多仁輪加が来ていたが今は途絶え、獅子舞の頭だけが残されている。津丸区の神興（じんごう）神社には早魃の時、御神輿をかついで宗像宮（そうぞうぐう、福間本町）まで下った祭りがあった。福間地域に現在まで受け継がれている祭りとしては玉せりがある。毎年1月に南町区と緑町区の若者たちによって玉せりが行われている。玉せりは江戸時代から続く古い神事で、本来は1月11日であったが、現在では1月初めの日曜日に行われている。海で清めた玉を先頭に裸の若者たちは、諏訪神社を参拝し、次に宮地嶽神社を参拝してから福間浜に戻る。玉せりに使う大玉は、松の芯で作られており直径31センチ、重さ12キロである。箱崎宮（福岡市東区）でも同じような神事があるが、玉せせりと呼ばれている。

夏には、毎年7月13日に本町区の諏訪神社を出発して緑町区、南町区を回ったという福間の山笠があった。明治の末、津屋崎祇園山笠を参考に子供山笠が作られ、これが発展して福間の山笠になった。戦争で中断されていた福間の山笠は昭和51年に43年ぶりに再興し、当時は中町、北町（緑町）、南町の3つの流れと子供神輿があったが、昭和54年頃、火災で焼失した後はふたたび途絶えた。

一方、旧津屋崎町では勝浦の人形浄瑠璃や津屋崎祇園山笠が今も残る。津屋崎地区の祇園山笠は、正徳2年頃（1712年頃、江戸時代中頃）に博多の櫛田神社から波折神社（なみおりじんじゃ）へ祇園の神様をお迎えし、毎年、旧暦の6月19日に山笠を奉納したのが始まりとされる。津屋崎祇園山笠は戦争で一時中断、戦後一度復活したが昭和38年に再び中断した。昭和50年に16人の発起人からなる「津屋崎山笠保存会」が発足。昭和54年に岡流、新町流、北流の3つの流れが復活し、現在に至る。毎年7月19日に最も近い日曜日に波折神社を出発し、津屋崎交番付近までのコースの追い山とその前夜に波折神社から金比羅神社、宮地嶽神社を参拝する裸参りが行われている。ここでは、福間地区での山笠復興の取り組みと水法被のデザインについて報告する。



2. デザインの方針

古い資料を見ると、山笠参加者は下帯（ふんどし）一本で、今のような衣装になったのは明治以降である。旧福間町の有志の会を大和会とし、山笠の衣装について6月初旬より詰所で検討を始めた。下帯の色は白が一般的だが、大和会は紺色を採用した。上半身は水法被で頭には鉢巻をする。水法被も濃紺の生地を選んだ。足には脚絆と地下足袋をはくが、地下足袋も紺色とした。長法被（当番法被）は紺と白の縦縞柄とした。旧津屋崎町の

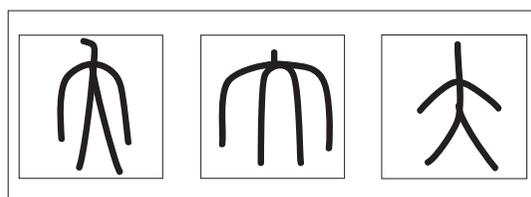
古い町並み、旧福間町の新しい町並みの両方にとけ込むようなデザイン案を提案した。

3. 要素別のデザイン

3-1. 水法被襟紋のデザイン

水法被の襟には大和会の紋をつけ、背中に大和会の「大」をモチーフとした模様を配置することとなった。襟紋は「篆刻篆書字典」(牛窪梧十著、二玄社、平成4年8月)の小篆、印篆、金文を参考に筆者がデザイン案を作成し、大和会で選定した。

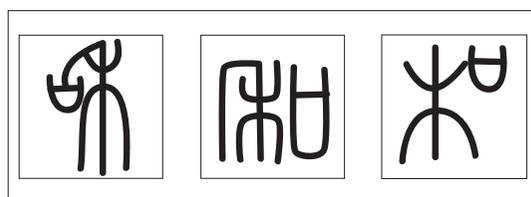
デザインによって新しいまちづくりの気運をつくり、参加者のシンボルとすることを念頭にデザインし、各種書類にも利用することを前提にデザインの検討を行った。



小篆

印篆

金文



小篆

印篆

金文



採用案

提案B

提案C

3-2. 水法被背中のデザイン

大和(やまと)会の「大」をモチーフとして2つのデザインを提案した。新しさと落ち着きという2つのテーマがデザインに求められた。最終案は大和会で選定した。

4. 今後の課題

福間地域で山笠を復興させる活動が始まって2年になる。昨今は住民主導のまちづくりが広がっているが、まちづくりの目標は各地域で差があるはずである。同じ目標を立てても住民に



理解されない場合もあろう。まちづくりは自分たちの生活の場である地域に目を向け、愛着を感じることからはじまらなくてはならない。今後は、自分の住む地域にどのような祭りや伝統文化が受け継がれているのかをさらに整理するために地域マップの作成が有効であると考えます。また山笠の復興については、郷づくり推進協議会等で地域住民の賛同を得ていくことが大事になる。



謝辞

豊村酒造有限公司（津屋崎）の協力により、津屋崎祇園山笠をモチーフにした日本酒ラベルを作ることができました。ここに記して、謝意を表します。

参考文献

- 1) 福間町、やさしい福間町の歴史、平成 15 年
- 2) 博多祇園山笠振興会、博多祇園山笠、平成 8 年
- 3) 福間町、福が住む町、平成 16 年
- 4) 朝日新聞西部本社、九州の祭り・春夏編、葦書房、昭和 58 年
- 5) 福間町教育委員会、福間あゝころ、平成 4 年
- 6) 福津市、福津市総合計画、平成 19 年

要旨

平成 17 年の合併により誕生した福津市における、山笠復興の取り組みとデザインの役目について記す。旧津屋崎町には古くから祇園山笠があり、現在でも 3 つの流れがある。一方旧福間町では明治期に山笠があったが今は途絶えている。平成 18 年より旧福間町の有志が会を組織して津屋崎祇園山笠に参加し、福間山笠の復興に取り組んでいる。平成 19 年には水法被、長法被（当番法被）の着用が許され、筆者が襟紋等のデザインを担当した。

キーワード：地域活性化、法被、日本酒ラベル、山笠